美術の窓(101)

大和文華館の陶磁
—その特徴と今後の課題—

大和文華館館長　水田　徹

近年、世界の陶磁史研究はめざましい進展を遂げつつある。

中国・朝鮮半島の陶磁研究では、例えば先日行われた東洋陶磁学会平成19年度総会における特別報告「海外の陶磁史研究の動向」で次のようなホット・ニュースが伝えられた。

2004年河南省禹州鈞台の建築工事現場で新たに大量の鈞窯陶磁片が発見され、出土遺物の検討の結果、1974年に同所近くで発見されたといういわゆる「宣和元宝」銘について再検討の必要が生じたこと、あるいは中国古陶瓷学会2006年南京年会では、老虎洞窯跡から「修内司窯」銘入りの陶片が発見され、「修内司官窯」問題の全容解明が視野に入ってきたことが報告されたなど、また韓国・木浦市で開催された「新安船発掘30周年記念国際シンポジウム」と「同シンポジウム記念特別展」の内容が報告され、引き揚げ遺物に関する1983年東京でのシンポジウム以来の研究成果および同発掘報告書の3分冊からなる集大成版の刊行（2006年12月）が紹介された。

日本陶磁史の研究に関しては、佐賀、兵庫、愛知、岐阜、滋賀、茨城など各地の美術・博物館での地元窯史を紹介する地道な展示、あるいは各地美術館での伝世品による茶陶磁名品展に加えて、京都国立博物館では特別展「日本人と茶—その歴史・その美意識—」が開催され、伝世品とともに最近の出土品が過不足無く展示され、茶陶磁の歴史を縦断的に観賞することが出来た。そしてその特別展図録によると（京都国立博物館、2002年）、例えば京都三条界隈から膨大な量の桃山陶磁が出土し、桃山期における茶陶磁の流通形態の一端が明らかとなり、あるいは同じく近年の考古学的調査・発掘の結果、美濃焼の中のいわゆる「織部焼」が古田織部存命中の遺跡では確認できず、一方、「織部焼」と同デザインの焼きものが京都でも製作されていたことが明かとなり、「織部焼」に対する古田織部の関与のあり方に改めて注目が集まる、等の事実が紹介されている。

中近東に目を転じれば、財団法人中近東文化センターによるアナトリア高原カマン・カレホユックの発掘は開始22年を迎え、例えば鉄器時代（新ヒッタイト帝国、フリギア、リュディア時代）の土器片の調査は、これまでの器形や彩文の型式あるいは成形技法の分類に加え、科学的成分分析結果の統計学的処理により、土器片の産地比定作業が格段に精度を増してきている（Anatolian Archaeological Studies Vol.XV, Tokyo 2006）。

さらに西方に目を向ければ、例えば古代ギリシア陶器史研究でも進展はめざましい。1970年までの60余年、英国のビーズリー卿は陶器画像の描線や刻線の質、輪郭と背景の対応関係、装飾文様個々の形態と装飾原理の分析等によって、3万点を越すアッティカ陶器を1千以上の陶画家ないし画家グループの手に分け、それまでの作者銘入り作品中心の陶画史研究を一変させたのであった。

彼の没後、一時期その研究手法は画家の比定と様式分析に偏り過ぎると批判され、陶器生産の手順や工房の仕組み、陶画家・陶工の社会的位置づけ、あるいは陶器市場の実状や流通経路の解明などに研究者の興味が集中した。しかしビーズリー生誕100周年に当たる1985年に、欧米各地で開催された記念シンポジウムや記念展を契機にその功績は再評価され、1988年、オックスフォード・アシュモレアン博物館にビーズリー・アーカイブが開設され、ビーズリーの分類に基づいた約7万点の陶器・陶片のデータがインターネット上に周到な索引機能付きで公開され、それによる正確な様式判断に基づく図像解釈あるいはその思想史的、社会史的背景が探索されるに至っている。

さてこうした研究状況下にあって、我が大和文華館の陶磁は如何に調査・研究され、展示企画されるべきであろうか。

まず第一に目指すべきは、所蔵品を新たな研究成果の枠内に精確に位置づけ、その結果を入館者の皆様に然るべく伝達することであろう。そしてそのために新たに視野に入った必要作品は機をみて蒐集に加えることも不可欠であろう。

第二に重要なことは大和文華館の陶磁蒐集の特性を見失わず、そのさらなる充実を図ることである。周知のように本館の陶磁器はほぼすべて伝世品であるが、大名家あるいは近世・近代の好事家による収蒐を母胎としたコレクションではなく、財団設立に際し美術史家・矢代幸雄の目を通して、つまり茶道具一式としてではなく、個々を美術品として評価・蒐集したものを核としている。従って茶の湯誕生以前の先史・古代の日常土器も蒐集に加え、茶器、茶碗も製作年代、生産地を可能な限りまんべんなく網羅している。

従ってその特性を活かすべく、年を追って日・中・朝の陶磁を産地別、製作年代順に並べて東洋・日本の陶磁史を概観していただくこれまでの展示法は、細部に工夫を加えつつも大筋で踏襲するのがまずは肝要であろう。

一方、陶磁研究の先駆者の一人であり、先に触れたアナトリア高原カマン・カレホユックの初代発掘隊長でもあった三上次男はある著述の冒頭に「いったい焼きものとは火と土と人の三者の融和・結合によって生まれた人類の誇るべき創造物である」と記しておられる（『陶器講座5』雄山閣1982年）。正に同感である。そしてこの「土」を「金属」と置き換えればすなわちそれは金属工芸であり、「火と土」を「木と漆」あるいは「紙ないし絹と絵具ないし墨」と読み代えれば漆工芸となり、絵画あるいは書となる。つまり何れもが人類の目と手による創造物である点は共通しているのである。

そのことを念頭に、場合に応じ、他ジャンルの工芸品あるいは書画をも陶磁に並べ展示に加え、企画意図を一層鮮明に示す工夫も必要ではないか。

むろんその際、例えばある時期の絵画と工芸を徒に並べて論のみ積み上げ、これが時代精神ですなどと断じるのは厳に慎まねばならない。それぞれの美術品にはジャンル固有の様式なり技法の特性・制約があり、それを無視した展示は客観性を欠く。ジャンル固有の様式概念と様式展開を十分に押さえた上で、かたちのあり方、作者の意図の行方などに共通項を見い出し、同じ方程式が他の展示品にも当てはまることを確認した上で作品論、作家論、ひいては造形による時代精神の発露に思いを致すこと、最低限その手続きは踏む必要があろう。

季刊 美のたより No.159
平成19年6月29日
発行　大和文華館

Copyright ©2010 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.